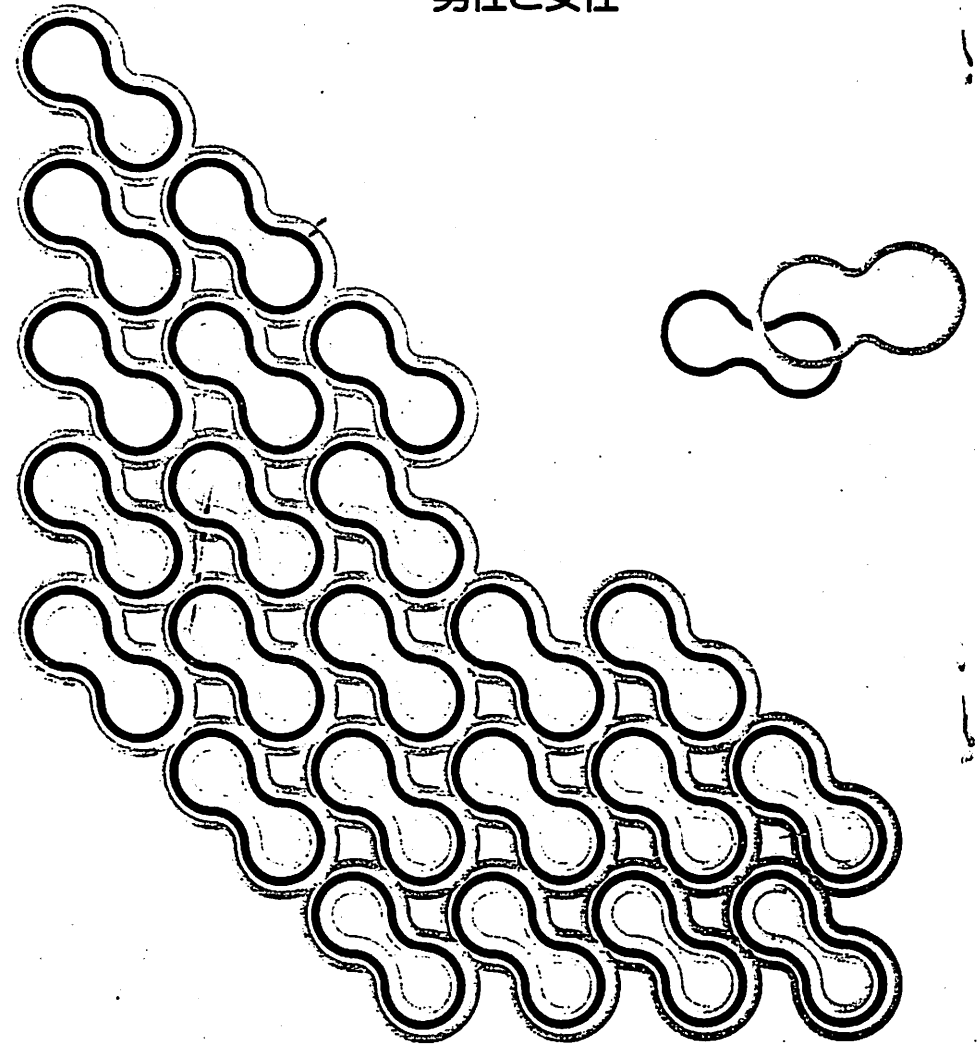


婦人問題通信講座

21世紀を創る Part II

——男性と女性——



静岡県

第四章 現代家族と女性

静岡大学教育学部・助教授 馬居政幸

(一) 前回を受けて

(二) 今、家族の何が問題か

- 1 家族の変化が家族の観方を変える 138
- 2 家族の多様化が示唆するもの 141
- 3 問題は家族の多様化だけか 148
- 4 安定している家族の中にこそ問題が 151

(三) 私の家族の場合

- 1 家族の変化と子どもの成長 155
- 2 研究室から家庭へ 162

(四) 変化する家族の中の男と女

- 1 私の家族の変化を通して見えるものは 168
- 2 “父母”から“夫婦”へ 176
- 3 新たな“男と女のつきあい”へ 183

第四章 現代家族と女性

静岡大学助教授 馬 居 政 幸

(一) 前回を受けて

前回の視点は

本章の章題である「現代家族と女性」というテーマについてこれから私が述べることは、前回のテキストでの考察を前提にしたものです。いわば「続・現代家族と女性」というわけです。

ただし前回のテキストで私が担当したのは「現代家族と婦人」というテーマでした。今回は「婦人」が「女性」にかわりました。この変化は、単に言葉が入れ換えられただけでなく、近年の女性をとりまく状況の変化の大きさを象徴するものと考えます。

しかし、この点についての私見は後に提起するとして、ここではまず前回の考察を受けるものとして、「現代家族と婦人」という前回のテーマに対する私の視点を改めて確認することから続編を始めたいと思います。なお、続編といってもその内容は独立したものです。そのため、この章のみを読まれても理解できるように記述しま

す。が、もし可能でしたら前回のものも読んでいただけることを願っています。

さて、前回において「現代家族と婦人」というテーマについて私が提示した視点は次の二点です。

① 「あなた自身の世界の問題」

② 「私自身の世界の問題」

「あなた自身」とは、いうまでもなく本書をテキストとして婦人問題通信講座を受講されている方です。「私自身」とは、この文章を書いている本人（馬居）のことです。

「こんな当たり前のことをなぜわざわざ書いたのか」と不思議に思われる方が多いでしょう。しかし、実はそれほど当たり前ではないのです。そしてこの『当たり前ではない』ということを理解していただくことが、「現代家族と婦人」というテーマについて考える際の最も重要なことであると私は考えました。

その理由は三つあります。

全ての人が対象

まず一つは、「現代家族と婦人」というテーマは、結婚した女性とその女性の家族との関係に限定することはできないということです。それは現代社会で生活するあらゆる人にかかわることです。

一般に婦人という言葉は、成人した女性あるいは結婚をした女性を意味する言葉として使用されます。そのため、「現代家族と婦人」というテーマは、直接的には既婚女性にとっての家族の問題としてとらえることが自然でしょう。しかし、私は、たとえそのように問題を限定したとしても、その問いと答えは、子どもとの関係では母親、親との関係では娘、夫となる男性との関係では妻、男性の親との関係では嫁……としてかわるさまざまな人と人の間（あいだ）の関係を総合する過程において見出すべきものと考えます。

さらにより広く、ヒトとして生まれ、人間として育ち、男性あるいは女性として生きている者は、全て家族とかかわりなく生活することは不可能であるはずです。

たとえ自分は独身でも、仕事や友人との関係で家族とかかわらない人はいないでしょう。何よりも誰しも家族とかかわりを抜きに

は自己形成の歴史を語ることはできないはずだ。

一組のオスとメスの性的な交渉の結果誕生した生命体は、ヒトであつても人間ではありません。ヒトから人間へと変化する過程において、現代日本では、家族という社会集団と全く関わりなく育つことは、慣習的にも法律的にも不可能です。

模範回答はないけれど

ところが、このように「現代家族と婦人」の問題を、日本で生活する全ての人が対象であるとして考えますと、今度は逆に、家族と女性のあり方については、どのような人にも当てはまる普遍のあるいは模範的な答えはありえない、ということになります。これが二つ目の理由です。

たとえば、問題を既婚女性とそのパートナーとなる男性との関係に限定したとしても、新婚夫婦の問題、子育て真っ最中の夫婦の問題、子どもが独立したあとの悠々自適の夫婦の問題、それぞれ答えは全く異なるはずです。このことに代表されるように、家族のパターンとそこでの問題のあり方は無限といていいでしょう。それを同じ尺度で判断することは不可能です。

しかし、判断すべき共通の尺度がないからといって、それぞれの家族が勝手に生活するわけにはいきません。とすれば、どのような家族と女性のあり方が正しいかは、最終的にはそれぞれの家族と女性自身が決めることです。いいかえれば、「現代家族と婦人」に関する研究や論考が、その当事者である個々の家族や婦人と呼ばれる女性一人ひとりに提供できるのは、それぞれ個別の問題を判断するための材料のみといわざるをえません。これが三つ目の理由です。すなわち、第一に、「現代家族と婦人」という問題は現代社会で生活する全ての人を対象にすることではない。第二に、そうである以上、「現代家族と婦人」の問題を解決するための普遍的な答えはありえないこと。第三に、だがそれは解決方法がないということではなく、全てを応用問題としてとらえ、模範回答に頼るのではなく、自分自身でその答えを創造しなければならないこと。

この三つが、「現代家族と婦人」というテーマについて考察する視点として、①「あなた自身の世界の問題」、②「私自身の世界の問題」という二つを、「当たり前」と思われることを承知で、「わざわざ」提示した理由です。その重要性を理解していただけたでしょう。

うか。

全てが前にある

研究者である私が本書で記述できるのは、日本全体の平均に基づく一般論とそれを理解するための個別事例にすぎません。しかし、受講生の皆さんは、自らが生きる世界である「現代社会と婦人」というテーマを、研究者である私のように平均値で考えたり評価したりすることは絶対避けて下さい。このような私の思いを表現したのが「あなた自身の世界の問題」とするもう一つの理由です。

さらに以上のことは、もちろん研究者であると同時に、妻にとっでは夫であり、四人の子どもにとっては父親であり、母親にとっでは息子でもある私自身にも当てはまることです。そこで、人に要求する以上はまず自分自身を素材にして、という趣旨から、一般論を応用するための個別事例として私と私の家族をとりあげることが、「私自身の世界の問題」としたもう一つの理由です。

要するに、この「現代家族と婦人」というテーマに関する限り、全ての人が当事者です。その意味で、「自分自身の生き方」とかわりなく学習することは無意味です。というのが私の立場です。

私は前回、最後に次のように述べて終わりました。

「あくまで家族は平均的な傾向で語るものでなく個別の世界にあるものと考えます。一人の男と一人の女が縁あって出会い、最も長い時間と空間を共有する不思議さこそ家族の特性かもしれません。その意味で全てが前にあり応用問題であることを指摘して本章を終わりたいと思います。」

この立場は今回も変わりません。全体の状況を把握するために、平均値に基づく一般的な論議を紹介しますが、あくまで私自身の家族の状況にこだわりのつつ再解釈していくつもりです。

ただし、変わらないのはこのような私の立場のみです。論ずる対象、論ずる視点、いずれも変わります。前回と今回の間にある三年という時間の流れは、家族と女性の関係を考える上で無視できない長さとなりました。「私自身の世界」も大きく変わりました。まさに「全てが前にあり応用問題である」ことを著者の私自身が実感しています。それを最も象徴するのが、最初に述べましたように、「婦人」に代えて「女性」が用いられた「現代家族と女性」という今回のテーマです。

そこで、この「婦人」から「女性」へと変化したことに対する私

見を述べるための前提として、まず家族自体の変化に目を向けたい
と思います。少し抽象的になりますが、変化する家族の実態が、そ
の変化をとらえるための視点をも変化させる次元にまで及んでいる
ことから指摘していきたいと思います。

(二) 今、家族の何が問題か

1 家族の変化が家族の観方を変える

改めて家族の定義は

「家族」の最も単純な定義は、「親族からなる集団」ということ
です。また、「親族 (Kin)」は「血縁と婚姻のいずれかによって結
ばれていると、認知しあっている人びと」と定義されます。さらに
この定義を基礎として、一組の夫婦とその子どもからなる家族、す

なわち「核家族」という概念が構成されます。そして、これまでの
家族に関する研究は、この「核家族」という家族のあり方を基本的
な単位として、さまざまな形態を示す実際の家族を分類したり、分
析したりすることにより行われてきました。

- ① 特定の男性と女性の「性的関係」
- ② その男女を親とする子どもとの「血縁関係」
- ③ この二種類の人間関係を社会的に認める「婚姻」という制度

この三つの条件が、家族という人と人の結びつきの最も基本にあ
るものとして考えられてきたわけです。ところが、最近、どうもこ
のような観点では現代家族の実態をとらえられないのではないかと、
という疑問が研究者の間に生じています。あまりにも家族の形態が
多様化してしまい、このような基準で分析することが不可能になっ
てきたからです。

家族の多様化

結婚をして、夫婦が共にフルタイムの仕事を続け、子供は持たな
い DINKS (ダブルインカム・ノーキッズ)。結婚という社会的な

制度自体を拒否するシングル。男性と女性という異なる性（ヘテロセクシャルティ）による婚姻ではなく、男性と男性、あるいは女性と女性という同じ性（ホモセクシャルティ）による婚姻。

いずれも、ほんの数年前まではマスコミが興味本位で紹介する単なる流行現象、あるいは少数の者のみが嗜好するアブノーマルな形態として位置づけられていました。しかし、どうも最近の論調は、学問的にも法律の上でも、誰もが選択しうる家族形態の一つとして認める、という方向に向かいつつあるようです。

血縁関係から自由な DINKS。婚姻という制度から自由なシングル、異性との性的関係から自由な同性による婚姻。

これらは、あくまで成人した男性と女性がそれぞれ自分の価値観や欲求に基づき主体的に判断して選択したものです。一人の男と女が自分の責任で選んだ生き方である以上、自由で平等な社会の原理にしたがい問題視すべきではない、というわけです。

もっとも、いずれの家族形態も先に示した核家族を典型とする従来の家族の条件に当てはまらないことは事実です。しかし、それはあくまで家族の定義の問題です。

一般に、定義とはさまざまな事象の共通部分をもととして構成さ

れたものです。まず事象があって定義が生まれるわけです。したがって、その事象が大きく変化すれば定義もまた変化せざるをえなくなるわけです。

その意味で、これまでの定義に当てはまらないから問題ということにはならないはずです。もしこのような家族の多様化に問題を見出すとすれば、それは家族の多様化自体ではなく、多様化をもたらした原因の方にあると考えます。

2 家族の多様化が示唆するもの

問題は多様化の背後に

なぜシングルを問題とするのか。もしも、理由が、家事や子育ては女性の役割といった伝統的な性別役割分業に対する女性の側からの拒否、ということでしたら、当然のことながら、家族と女性の関係を問う上で無視できない問題となります。

図-1

(1)	公	公事→会社→父親→生産→文明→文化→知性→理性→ ☆漢字→経済→政治→法律→四年制大学……………→	男=夫=主(の)人
(2)	私	私事→家庭→母親→消費→自然→野性→感性→感情→ ☆ひらがな→文学→教育→短期大学……………→	女=妻=夫(の)人
「(1) 公」の領域は「(2) 私」の領域に対して優先する。			

「男である夫が家の外」で働き、「女である妻が家の中」の事を主婦として担う。このような性が異なることを理由とする家族の中の役割の違いは、同時に、「仕事を公的」なものとし、「家事を私的」なものとする社会的な公私の区分とセットになっているはずだ。さらに日本の場合には、「公的なものを私的なものに優先する」という社会の仕組みとも連動しているはずだ。その結果、意識しているかどうかは別として、私達の社会の中には、図-1に示すような「男を主」として「女を従」とすることにつながる(メタファーとする)関係がないでしようか。

したがって、家族の多様化の原因を女性の側による性別役割分業の拒否ととらえるならば、その問題の及ぶ範囲は家族に止まらないことになります。広く「男と女が共に生きる」ための関係のあり方全体に対する「女性の側からの意義申立て」としてとらえなければならぬと考えます。(公私の別と家族の関係については、前回のテキストを参照してください。)

男も女も公事の世界に生きるためには

DINKSとシングルは、ともに女性が社会に出てフルタイムで働

くことを前提とした男性と女性の関係のあり方です。それは図-1でいえば、「公事」の部分で女性と男性が共に担うということですが、ではその場合、「私事」を担うのはだれでしょうか。

一つの家族において、夫である男性と妻である女性が共に公的な世界を担うことを前提とするならば、私的な世界の担い手に対する選択肢は次の四つになるはずです。

- (a) 従来どおり「私事」も「女妻」が担う
- (b) 女性に代わって「私事」を「男夫」が担う
- (c) 「公事」も「私事」も「男女夫婦」が共に担う
- (d) 「男夫」も「女妻」も「私事」を拒否する

(a)は、女性が一人で二人分のことをすることになります。よほどのスーパーウーマンでなければ困難でしょう。肉親、友人、公的機関などの助けが必要になるのが普通です。最近の結婚の条件が、「家つき、カーつき、ババーぬき」から「家つき、カーつき、ババーつ」に変化した理由もあり、詳しくは前回のテキストを参照してください。

(b)は、男と女という性差を基準に割り振られた社会のシステム

をそっくり入れ換えることになります。この選択肢を選ぶには、本人同士の了解だけでは終わらないさまざまな困難が生じることが予想されます。多分、まだ日本の社会では、妻がフルタイムで働くことを受け入れさせることはできても、夫が家事を全面的に担うことを理解させるのはかなり困難だと思います。

なによりも、女性の場合は、伝統的には職業婦人、現代ではキャリアウーマンに代表されるように、仕事と家事双方をこなす「スーパーウーマン」の存在はそれなりに想定できます。しかし、男性の場合の「スーパーマン」はどうでしょうか。

男も女も公事と私事の世界に生きるためには

(c)は、公的な世界を「男Ⅱ夫」と「女Ⅱ妻」が共に担うなら、私的な世界も「男女Ⅱ夫婦」で、という考えです。最も妥当に思える選択です。ただし、これは、公と私の二つの世界を担うためのさまざまな能力や意欲を、「男Ⅱ夫」と「女Ⅱ妻」が等しく持つていることが前提です。文字通り、イコールパートナーでなければならぬわけです。

さらに、(b)ほどではないものの、やはり社会システムの改変が

必要になるでしょう。

公的な世界では、「仕事の鬼」とか「趣味は仕事」などとおだてられ、しかし、自分の身の回りのことは「子どもと同じ」ように専用の女性（一般的には妻）に面倒をみてもらわなければ何もできない男によってしか、こなすことができないハードな仕事のあり方が問題になるでしょう。

私的な世界では、ゴミ回収の時間から学校の参観日の曜日まで、昼間家にいて自由になる時間がある者によってのみ担うことが可能な家事や子育て（学校教育）の仕組みが障害になるはずです。

DINKSで問題は解決しない

したがって、(c)の選択を容易にするためには、(a)の場合よりもより徹底して、さまざまな援助のシステムの考えなければならぬでしょう。あるいは、最初から、仕事以外のもので敢えて担わなくてもよいものを公私双方の世界から取り除いておくことも考えられます。その一つが子どもを産まないことを選択する道です。それがDINKSという家族のあり方です。

では、DINKSになれば、(c)を選択する上での問題は解決するで

しょうか。多分それほど簡単ではないと思います。

たとえば、結婚するにあたり、子どもを持たずに互いに仕事も家事も半々にすることを約束したとします。私的な世界は二人で決定することですから問題はありません。しかし、公事の世界はそう簡単にはいかないはずで、結婚当初あるいは仕事の負担がそれほどかからない若い時代はともかく、年齢を経るに従い変化してくるはずで、夫と妻それぞれの仕事の時間帯、内容、人間関係、責任の範囲、職階、収入、疲労度等、さまざまな差が生じるはずで、

その影響は当然私的な世界にも及ぶでしょう。いずれか一方が相手に対して違和感や不快感を感じたとき、私的な生活空間と時間を共有することに疑問が生じたとしても不思議ではないはずです。

選択するのは男か女か

一組の男と女が、違和感や不快感を我慢してまで私的な生活を共有する理由が見出せなくなったとき、その世界への参加を拒否する(d)の選択が生じることは必然かもしれません。

シングルの誕生です。それは、互いに必要とするときにのみ特定の男と女の私的な世界を共有し、それ以外はそれぞれが独自に公私

の世界のバランスをとるような生き方といえるでしょう。

あるいは、図1に示した「公Ⅱ男」と「私Ⅱ女」という性差のメタファーとしての社会システム自体を拒否する生き方が、(d)の選択といえるかもしれません。そして、男と女、どちらの方が拒否する率が高いかはあえていうまでもないでしょう。

あらためて、(a)から(d)の四つの選択肢が、あるいはDINKSやシングルという選択肢自体が、いずれも男性ではなく女性の意思により選択されることを前提としたものであることに注目したいと思います。どうも、女性として生まれたということのみを理由に一定の社会的役割が割り振られることを、女性が拒否すること。それが家族の多様化の底流に流れるものといわざるをえません。先に、家族形態の変化を「男と女が共に生きる」ための関係のあり方に対する「女性の側からの意義申立て」と記した理由です。

3 問題は家族の多様化だけか

問題は男と女の関係に止まらない

DINKS やシングルは、その理由はともあれ、結果として一組の男性と女性が自分の子どもを産み育てることを意図的に拒否する家族形態です。この変化は一对の男女のありかたに止まらない問題をはらんでいます。

社会が連続して存在するためには、その社会を担う新たな人間が産み育てられなければなりません。そのため、もし、家族の中で生命の再生産が行われなるとすれば、どこかにそれを担う社会的な制度を設けなければなりません。

この問題は、往々にして、男性と異なる女性の特性を、「産む性」と「育てる性」をセットにした「母性」としてとらえ、その保護も含め女性の母親としての役割を強調する、という論点に移行しがちです。だが、私はそのような立場をとりません。より普遍的に、社会的に一人前（成人）として認められた（とされる）男と女（大

人）と、認められるために「学び育つ（教育育てられる）」「男と女（子ども）」との関係のあり方、という視点でとらえたいと思います。

- ① 性的欲求により結びつく男と女
- ② 生命の再生産としての子どもを産む男と女
- ③ 子どもを一人の人間として育てる男と女

この①から③の男と女の相互の関係を、いかに新たに創造するかが問われていると考えます。

私達が一般にイメージする核家族は、①から③の男と女の関係全てを一つの家族の中にまとめた社会制度といえます。あるいは、夫婦の問題としては、②のみを重視して制度化されたのが、日本の伝統的な家制度のもとでの家族ではないでしょうか。そこには、①は妾宅、③は乳母や下男という男と女の関係があったはずで

もし、今日の家族の変化が、このような核家族や家制度の概念でとらえられないものとすれば、改めて大人と子どもの関係を含めた①から③の男と女の間を問う必要があると考えます。

そして忘れてはならないのが人権の問題

これまで私は、現代家族の変化の意味について、男性と女性の自由な意思に基づく結びつきを社会的に保障する上での問題点とは何か、という観点から考えてきました。しかし、同性による婚姻の原因、とりわけ女性と女性による婚姻の原因が、男性の女性に対する一方的支配や暴力にあるとすれば、問題は別です。それは男と女の関係を越えた「人間としての権利」、すなわち人権の問題として対処すべき課題であることを指摘しておかなければなりません。

また、DINKS やシングルも含め、このような多様な家族形態が、その形態故に社会的に不利益を被る（差別される）ことがあるとすれば、やはり人権の問題として問われなければならないことを強調しておきたいと思います。

さらに、どのような家族形態であろうとも、社会的弱者としての子どもや高齢者やハンディキャップをもった人達にとっての家族の意味を問うことなく、単に男と女の問題のみで家族のあり方を判断することは避けるべきでしょう。あるいは、中央と地方、都市と農村、日本とアジア……さまざまな問題の複合的な要因を無視して、

異なる文化に育った人達が家族として生きることにより生じる問題を、一組の男と女の問題に解消することは慎むべきでしょう。

いずれも、家族の問題が「人間であること」の条件の次元から問われている、ということをお記しておきたいと思っています。

4 安定している家族の中こそ問題が

日本の家族の多くは安定しているように見えますが

これまで、私は、現代家族と女性の関係についての今日的な問題点を明らかにするために、最近顕著になってきた新たな家族形態が示唆する問題に注目してきました。

しかし、多分、私のこれまでの指摘に対して、

「こんなの家族っていえるでしょうか、特別な人達の問題でしょう、これから結婚する若い人達の問題にはなるかもしれないけど、とにかく子どものいる私の家族には関係ないことです」

と思われる受講生の方もおられると思います。

あるいは、お子さんが独立して改めて自分の人生を創造されてい

る方であれば、

「あなた自身の世界の問題ですといわれても困ります」

と不満をもたれる方もおられるでしょう。

「じいさんとはあさんだけでなく、ひいじいさんとひいばあさんまでいる私の家族からみれば、まったく別の世界のこと」

とあきれておられる方もおられるかもしれません。

たしかに、DINKSやシングルという家族を選ぶ方は決して多数派ではありません。同性による婚姻も日本では公的に認められていないとはいいたいと思います。

また、日本の家族の六割以上は核家族です。また、少子化を背景に、今後はむしろその解体ではなく、拡大(多世代)家族が増加する方向で変化する可能性が高いことも指摘されています。

少なくとも、日本の家族は近い将来に急激に変化することはないということが、さまざまな調査結果において確認されていることは否定できません。社会の高度産業化を達成した国の中で、最も安定した家族の構造を保持しているのは日本であることに、私も同意したいと思います。

本当は核家族や多世代家族の問題です

しかし、私はこのような疑問がでることを承知の上で、従来の常識では家族とは考えられない男性と女性の関係のあり方を、あえて新たな家族と位置づけて問題点を考察してきました。その理由は、日本の非常に安定しているかに見える核家族や多世代家族の中に、これまで指摘してきたことと同質の問題を見出したからです。新たな家族形態が示唆する問題とは、実は現代家族が当面する課題を結晶化したものであることに気づいたからです。

これまで考察してきた新しい家族形態とは、一八三ページで提示した家族の三つの条件である、①男女の「性的関係」、②親子の「血缘関係」、③「婚姻」という社会制度、のいずれかが当てはまらない家族の問題でした。

他方、日本の家族の約六割は核家族で、その核家族が世代的に複合した家族形態である大家族が約二割です。この数値を見れば、核家族の概念をもとに三条件が構成された以上、当然日本の家族の八割がこの三つの条件を満たしていると考える人が多いと思います。私もその一人でした。

図-2

三 年 前		現 在	
静岡の私の官舎に四世代が同居		静岡と鳴門にわかれる	
静 岡	祖 母 (85歳) 母 (64歳) 私 (38歳) 妻 (35歳) 長 男 (小学校5年) 長 女 (小学校1年) 次 男 (幼稚園年中組) 次 女 (3歳)	鳴 門	祖 母 (88歳) 母 (死亡)
		静 岡	私 (41歳) 妻 (38歳) 長 男 (中学校1年) 長 女 (小学校3年) 次 男 (小学校1年) 次 女 (幼稚園年長組)

私の家族の問題でもあるのです

ところが、最近になって、私はどうもちがうのではないかと思うようになりました。確かに、私自身の家族も含め、私がつきあう人達の家族は核家族もしくは祖父母と同居する拡大家族がほとんどです。しかし、その実態を知るにつれ、家族内の人間関係、とりわけ女性のおかれた位置とその問題点は、むしろこれまで論じてきた新しい家族形態と同質の問題としてとらえた方が理解しやすいことに気づきました。

そして私がこのような発想の転換をした契機は、私自身の家族の変化にありました。

(三) 私の家族の場合

1 家族の変化と子どもの成長

前回のテキストに書いたあとで

前回のテキストで紹介した私の家族の状況と、その後三年間の変化を図-2にまとめてみました。

最も大きな変化は母の死でした。

前回執筆時には、私の家族は私の母と祖母、そして私の四人の子どもと妻が同居する四世代八人でした。しかし、母が発病し約半年の入院のあと亡くなったことにより、家族は二つに分かれました。

一つは静岡の私の家庭。私と妻と四人の子どもです。人数は平均より多いものの、形態としては典型的な「核家族」になりました。

もう一つは四国の鳴門にある私の生家。祖母が一人で生活しています。本来なら長男のところに戻るべきなのですが、娘(私の母)

が建てた家を守るといいながら米寿の歳を一人で生きています。

前回にもふれましたが、祖母は、娘が私の父になる男性と結婚した昭和二〇年代半ばから四〇年近く、私の家庭で母とともに気儘に暮らしてきました。その母が先に去ってしまったわけです。私も含め親類は全て祖母のことを心配し、長男の叔父のところにもどることを勧めました。ところが、逆に、祖母の気持ちには、米寿を迎える歳になって、いまさら息子や嫁に気兼ねする生活に戻りたくない、ということであったようです。

そして、母が亡くなって三年。私と家族が夏休みと冬休みに帰省するたびに、私の四人の子どもに対して次のようにいいつつ、母の代理役をかってでて、かえって元気になった面もあります。

「ちいちゃいばあちゃんがおらんようになったんで、いなかの家におおきいばあちゃんがおらんんだら、まごがかわいそうじゃ」

祖母は「シングル」の世界に生きているわけです。

長男が中学に、長女と次男が小学校に、次女が幼稚園に

この三年間で私の人生にとって最も大きな出来事は母が亡くなったことです。だがそれは、「息子としての私」にとって、というた

だし書を加えなければならぬでしょう。母には申し訳ないのですが、私の子ども達は、自分たちにとっての祖母の死を、私が感じる重みで受け止めることができなかったと思います。そしてそのことは、息子ではなく、「父親である私」にとって最も重要な出来事は、四人の子ども達における変化であったことを意味します。

図12で示したように、この三年間に長男が小学五年から中学一年に、長女は小学一年から三年に、次男は幼稚園年中から小学一年に、末っ子の次女が幼稚園年中になりました。(もっとも、学年は全てこの原稿を書いている平成三年三月現在です。本年度の受講生の方は一学年増やして読んで下さい。)これで子ども達はみんな昼間は学校(幼稚園)に通学(園)するようになりました。

その結果どうなったか。

まわりでは「おばあちゃんが元気なら喜んでくれるのに、でも奥さんもこれで少し楽になりますね」といってくれます。私達夫婦もそんなものかなと一時は思いかけたのですが……現実はいちり厳しいものでした。

図-3

小学入学時購入物(次男)		中学入学時購入物(長男)	
ランドセル	22,000	学生服	24,800
体操着(2)	2,600	カバン	11,800
ショートパンツ(2)	2,200	ベルト	1,980
帽子	350	ワイシャツ	3,560
上靴	880	スクールウェア	8,100
体育館シューズ	1,500	半袖体操服(2)	3,540
名札	20	ショートパンツ(2)	2,600
お道具箱	3,500	帽子	350
けいさんセット	3,000	上靴	1,550
防災ずきん	2,000	体育館シューズ	1,510
勉強机	37,000	ナップザック	2,000
えんぴつけずり	1,980	ネームプレート(2)	300
合 計	77,030円	校章	200
		夜光腕章	280
		アルトリコーダー	2,050
		通学用シューズ(雨用)	2,400
		スケッチブック	400
		ポスターカラー	1,100
		デザイン筆	600
		プラスチック皿	210
		製図用具	2,000
		木工具セット	6,700
		ノートセット	550
		合 計	78,580円

中学生の生活のすさまじさ

まず長男のこと。中学入学を前にして妻が学校で必要との連絡で購入した物(金額)の多(高)さにビックリ(図-3)。長男宛の進学塾や通信添削のダイレクトメールの多さにためいき。中学入学当初は遅刻寸前に駆け込んでいた長男が、部活動で入ったテニス部の朝練が始まるとともに、七時までに登校する姿をみて感心。最初の中間テストの準備が始まると、小学校の時にはほとんど机に向かわなかった長男が試験勉強している姿に感動。

と、ここまではよかったのですが、長男の一日の時間帯と試験結果の偏差値一覧表をみて考え込むようになりました。一つは、あまりにも自分で判断して決める自由な時間が少ないことでした。二つは、その前提に、高校受験を想定した成績の順位が文字通り一点二点の差で競う厳しさがあることに気づかされたことです。

私も妻もそれなりの受験勉強をしました。また私の仕事から受験の実情を知っているつもりでした。しかし、長男に課せら

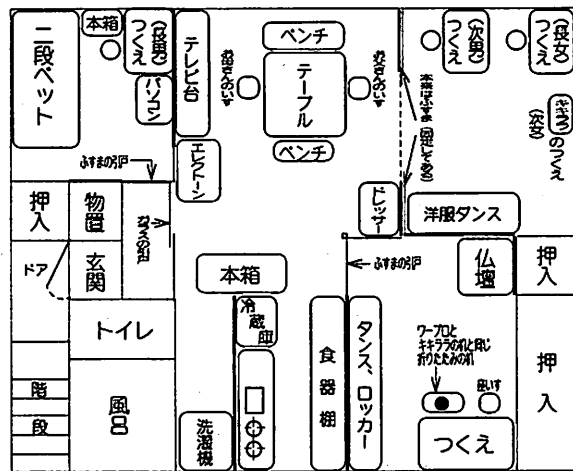
れた受験の重みは、私や妻の想像をはるかに越えるものでした。

長男の場合、朝七時から夕方六時ごろまで中学校での勉強と部活動。帰宅後は、休息と食事のあと、八時過ぎから十時過ぎまで机に向かう(ように努力しようとしている)。一時期近所の塾に通ったが、その時は食事もそこそこに塾にかけつけ、帰ってくるのは十時。それから宿題。今は塾をやめました。友達の多くは通い続けています。その意味で、多分、このような長男のスケジュールをみて、本書を読まれる方の中には、そんな甘いものではないよ、と思われる方も少なくないと思われます。(この問題に関する私なりの視点については、本章の末尾に参考文献をあげておきましたので関心のある方は参考にして下さい)。

いよいよ長男が思春期

もう一つの変化は、長男がどうやら思春期に入ったことです。なれない勉強に縛られることへの欲求不満が思春期特有の気分増幅されて、妻への口答えに、私への反発。それでも消えない苛立ちを解消するためにか、妹や弟への無理難題の押しつけ。わけがわからず妹二人は泣きだし、弟はふてくされる。それをみて頭にきた

図-4



の部屋に分け、寝るところは息子二人と娘二人がセット、勉強は長男は一人で、長女と次男は前後に並んで、としました。次男は寝る時間になると、勉強している長男の後ろにある二段ベッドの下段に潜り込むわけです。これが三LKの官舎で生活する大学教官の家族の実態です。もっとも、今回はこのようにしてなんとかしのぎましたが、問題はあと一年後。次女が小学校に入学する時です。既に分の机をどこにおくのか不思議がついています。とりあえず、小さな折りたたみの「キキララの机」を置いて納得させましたが……。その時はその時。何がおこるかかわからない昨今、今から悩んでもしかたがない、と思い、考えないようにしていますが、はたしてどうなることやら……。

でも、ともかく先のことより今はもう一つの問題である長男の変化に対処することが重要。と、再び夫婦で悩んで出した結論は、こんな狭い私の家庭に、私の仕事机を復活させることでした。

妻の怒鳴り声。それに再び反抗する長男の叫び。それはすさまじいものです。男の子が男へと脱皮するためにあがき始めたわけですが、しかし、このような思春期のつらさやしんどさについては、男である私にはある程度想像がきます。いよいよ私の出番だと思いました。

そこでどうしたか……。

次男の勉強机の購入と私の仕事机の復活

ところが、長男の勉強や思春期への対処の前に、我が家では処理しなければならぬ難問が一つありました。次男の小学校入学にもなって購入しなければならない勉強机のことです。我が家の約束で、小学校に入学すれば机を買うことになっていたので、

なんでこんなものが小学生に必要なのか、と思うものまでついた豪華な机の購入は、長男と次男がともに入学するということで、我が家の経済的な問題でありました。しかし、より難問は机を置く位置でした。すでに長男と長女の机があります。私の机は次男の誕生とともになくなり、今度は何をなくせばよいか……。

夫婦で悩んだ結果が図-4です。全体を息子二人と娘二人と夫婦

2 研究室から家庭へ

仕事人間から父親に復帰しようと思ったが

これまで家庭の中での私の場所は、子どもが一人増えることに少なくなっていました。長男のみの時は私の部屋がありました。長女が生まれ部屋はなくなり、机と書棚になりました。次男が生まれ書棚だけになりました。次女が生まれ全てなくなり、部屋の中央にある家族全員が使用する大きなテーブルを囲む椅子が一つだけ両肘のついたものになりました。それが通称『お父さんの椅子』。これが唯一私の居場所でした。仕事は一切大学の研究室で行い、家庭では父親として生きることにしたわけです。

ところが、実際には年齢とともに増える仕事量をこなすために、研究室で夜中まで原稿を書くことが多くなり、『お父さんの椅子』に座った時には、お父さんと呼んでくれる子ども達は全て夢の中。逆に子ども達が「お父さん、おはよう」と挨拶したくとも、今度は私が夢の中。妻が、中学生、小学生、幼稚園児と順番に起こして食

事をさせて学校に追い出す声を遠くで聞くだけ。家庭での私は、父親ではなく、仕事で疲れを解消するために食べて寝るだけの一人の男になってしまいました。

そんな中で生じた長男の問題です。妻一人では対処できないのは明らかでした。長女以下三人は、差はあるものの、まだ妻が直接手を掛け、口うるさく言わなければならない年齢です。他方、男の子から男へと脱皮するためにあがき始めた長男には、距離をとった扱いが必要です。しかし、一人の大人が、狭い家庭の中で日常的に接する子どもに対して、この二つの役割を同時に担うことは非常に困難です。とすれば道は一つ。四人の子ども達がこの世界に存在する原因を作ったもう一人の人間である私が、子ども達との世界、すなわち父親としての私に戻るしかないと考えました。

いよいよ『お父さんの椅子』の威力発揮ということになる……はずだったのですが、問題はそう簡単ではありませんでした。

父親から仕事に苦しむ人生の先輩へ

『お父さんの椅子』に座って父親に復帰するためには、子ども達が起きている時にテーブルを共有しなければなりません。それは、

夜大学の研究室で仕事ができないということです。当然こなせる仕事の量が減り、その必然として収入も減るわけです。しかし、収入を減らすことはできない事情がありました。

長男のもう一つの課題が受験勉強だからです。塾、家庭教師、通信添削、模擬試験、参考書……。どれを選択するかは別として、これから長男に始まり長女、次男、次女と子ども達が大学に入るまでの最低十年の間、必要なお金は増え続けるでしょう。

大学の先生といえは聞こえがいいですが、所詮は公務員。その中でも国家公務員の給料は最も安く、今の私の家族に仕事を断る経済的余裕はありません。加えて、嫌いな仕事ならともかく、私自身が悩みながらも意欲を持って取り組める仕事が多いことも事実です。

他方、私が家庭に入って妻が職につくという選択もあります。しかし、私が仕事を少なくして四人の子どもの世話をするのことに見合えば、収入を得る職場を、一度家庭に入った女性が得ることは、残念ながらかなり困難です。妻のフルタイムの子育て能力に私のパートタイムの父親能力ではたっちうちできないことも含めてですが。

家庭に戻らなければならないが仕事量は減らせない。この二律背反に対し夫婦で出した答えは、私が家で仕事をするということでした。

た。とにかく、何もできなくても、先ず母親ではない大人が家庭にいたことが重要というわけです。

母親と四人の子どもの関係のみであった家庭での人間関係に、私が間に入り、夫と妻、父親と子どもという関係を加えることにより、少しでも妻の負担を減らせれば、という考えからでした。さらに、子ども達、特に長男には、父親というよりも、『仕事をする大人の姿』に気づいてくれることを願っての決断でもありました。

家で仕事をするためには、そのためのルールが必要

なぜ、次男の机を置く場所に悩んだはずなのに、仕事机を入れる余裕があるのか。答えは、図1-4に示したように、夫婦の寝室の中の配置を変えてつくった僅かの空間に折りたたみ式の座り机を置いたのです。寝る時は仕事を片づけて布団を敷き、仕事が片づかなければ真ん中の部屋のテーブルを横によせて布団を敷くわけです。

こんなことで仕事になるのかな、と思いつながら始めました。最初はやはり仕事の能率は上がりませんでした。妻と四人の子どもによる怒鳴り声と鳴き声と呼び声の合唱に、「うるさい、仕事にならん」という私の声に加わっただけでした。そこで家族で話し合い（私の

一方的要求の面もありましたが）ルールをつくりました。

テレビは一日一時間で夜八時以降は土曜日だけ。見る番組は兄弟姉妹で決めること。小学生は遅くとも九時半、幼稚園は九時までに寝ること。長男は風呂。長女は食事を運ぶ。次男は食事の片づけ。次女は玄関の靴の整理。起きた時と寝る前には挨拶すること。

いずれの約束も直接的な理由は私の仕事の邪魔になる騒音をなんとか減少させるため、という生活の必要にもとづいた秩序づくり。子どもの「しつけ」のためではありません。また、実際には、私の仕事や妻や子どもの都合で約束が破られる日の方が多いと思います。だが、少なくとも六歳の次女から四一歳の私まで六人の家族一人ひとりが、それぞれの違いを前提に、自分がしなければならぬ（したい）ことを狭い部屋の中で行うために必要なルールをなんとか創り出してきていることも事実です。

研究室から家庭に仕事場を移して見えてきたこと

ところで、やっと家庭で仕事ができるようになってみると面白いもので、私達夫婦と子ども達とのコミュニケーションの過程でさまざまなことに気づきました。研究室では見えなかったことです。

まず、「子どもとのかかわり」で、いつのまにか子どものちょっとした行動や言葉一つひとつに、くどくどと小言をいっている自分に気づきました。逆に、家庭の中では少々おおめにみても、家庭の外では絶対守らなければならないルールがあり、それを子どもに教える時は言葉使いを変えている自分にも気づきました。どうも一言で「しつけ」といっても、生活する中でその場その場に応じて繰り返し自覚させるルールと、生活の都合にかかわらず教えなければならない原則があるようです。

他方、「子どもとかわからないこと」で気づいたこともありました。それは、急ぎの原稿書きで昼間も部屋にこもって折りたたみの机の上にあるワープロをたたき、そのため何年かぶりに妻の用意した昼食を二人で食べる機会があった時のことでした。ふと出た私の言葉に対する妻の応答が突き刺さりました。

「おまえ、もし、おれが家で仕事していなかったら、一人で昼ごはんたべるんだよね……つまらないね」

「そうよ、つくる気もなくて……朝の残りものですませたり……ホカホカ弁当を買う主婦の気分……ワカルデシヨ……」

「三食昼寝つき」という専業主婦を揶揄する言葉がいかに当事者

の思いを無視した勝手な表現かを改めて実感しました。

そして、私の家族と家庭にも、DINKSやシングルや同性のみの家族と同質の問題が生じている（くる）ことにも気づきました。

(四) 変化する家族の中の男と女

1 私の家族の変化を通して見えるものは

子ども四人は一般的ではないが

私の家庭は子どもが四人いることにより、多分、他の家族とは異なる状況にあると思います。しかし、私の家族がこの三年間に直面した問題が、DINKSやシングルや同性のみの家族、あるいは子どもが少ない核家族や逆に家族数が多い拡大家族の問題と異質であるとは思いません。むしろ、子どもの人数が多いことにより、母と祖

母のことも含め、多様な家族の様々な問題のかかなりの部分が、私の家族の問題の中に入り込んでいると考えます。

少なくとも、私の家族は、三年前までは四世代にわたる拡大家族として、現在は核家族として、それなりに安定した家族として統計上ではカウントされるはずです。そのため、私の家族の問題を、DINKSやシングルや同性のみの家族と比較しながら一つひとつ解きほぐすことから、一見安定しているかに見える日本の現代家族が、現在あるいは近い将来に当面すると思われる課題を見出すことは、あながち的外れではないと思います。

シングルはだれもが通過する家族のありかた

祖母が母の死を契機にシングルライフを生きていることは既に紹介しました。もっとも、現代の若者の結婚観や家族観を示唆するシングルと、米寿を越した祖母の生活を表現するシングルでは、その意味が異なると思われる方もおられるでしょう。しかし、日常生活を自分一人で処していくことは共通しているはずで、何よりも、シングルライフを選択した若者も、いずれ祖母の年齢を迎えることを忘れてはならないでしょう。

ところで、母は発病後、故郷の徳島の病院に入院しました。そのため、一人息子である私は、新幹線と飛行機回数券を買い、静岡と徳島を幾度か往復しました。妻は子どもがいるため動けなかったからです。今後も祖母が元気である限り、夏と冬は家族全員が鳴門で過ごすことになるでしょう。

このような、祖母が現在の生き方をせざるをえなくなったことに関係して、この三年間に生じた私の家族の変化は、私の家族のみの特殊事情ではないと思います。高齢化が急速に進む一方で、規模が小さくなっている現代日本の家族においては、かなりの確率で経験しなければならぬ問題であるはずで、すなわち、シングルの問題は、時代の流行現象ではなく、八十年の人生において誰もがいずれ出会う最も重要な課題になるといっても過言ではありません。

これまでこの問題は、『嫁や娘の問題』、あるいは公的施設による福祉や医療の問題として扱われる傾向がありました。しかし、だれもが当面することであるとすれば、それはもう問題ではなく、入学や就職や結婚や子育てと同じように、人が人間として生きる上での課題として位置づけるべきでしょう。そして、人間としての課題である以上、『嫁や娘』の問題でも特定の施設を建てれば良いという

問題でもないことは当然でしょう。

シングルを支え合う家族の新たなあり方を

人間としての基礎を築く場が家庭だとすれば、親が子どもに身につけさせるべき力の一つに、人生のさまざまなステージにおいて日常生活を一人で処すことのできる技術を加えるべきでしょう。もちろん、男女を問わずです。とりわけ男にこそ必要です。

伝統的に、日常生活を処するための技術や意欲に関する文化は、女性に割り振られてきました。その意味で、意図的に、それも早急に準備しなければならないのは、男性（とりわけ息子と夫）に対する教育です。

かつて自立の問題は、女性の経済的自立にありました。しかし現代は、男性の生活的な自立こそ課題だと考えます。

また、この問題は、家庭での教育という、一つの家族のみの課題に止めてはならないでしょう。公的施設を整備すること、あるいはさまざまな施設や機関が生活者（利用者）の立場から相互に連携することが重要です。さらに、何よりも、家族と家族の間（あいだ）に互いに支えあうネットワークが創造されなければなりません。施

設は一定の障害を前提に利用できるものです。しかし、シングルライフは病気でも機能障害でもありません。

祖母にとって最も頼りになるのは、静岡に住む孫の私ではなく、家の斜め前の煙草屋の祖母より少し若い他人のおばあさんです。

その意味で、最も基本となることは、私達自身の日常生活における人と人の結びつきの中に、シングルライフを支え合う意識と行動をいかに創造するかであると考えます。

ただし、この点については、在宅福祉、地域ケア、有償ボランティアなど、検討すべき課題は様々あります。詳細は第六章で学んで下さい。(なお、家族の規模の縮小が女性の生き方にどのような影響を与えているかについては、前回のテキストを参照下さい。)

ところで、もう一つ別の観点からシングルライフが示唆する問題を指摘することができます。それは、祖母ではなく私自身や私の妻が、それも未来ではなく現在の生活の中において、シングルとしての生活を余儀無くされる可能性があるということです。

妻の場合は

先に、妻と私の昼食の会話を紹介しました。そして、子どもが学

校へいった後の専業主婦の気分を指摘しました。私の妻の場合は、末っ子がまだ幼稚園であることにより、あと何年かは子育てにかかわることで日常をすごさざるをえないでしょう。しかし、日本の多くの家庭では子どもは二人か三人。我が家の二人目は小学校三年、三人目は一年で、妻は現在三八歳。本書を読まれる方で、ご自身も含め、妻と同年代の方で、昼食を妻と同じ気分で過ごす女性を知っている方は少なくないと思います。

そして、その方たちのかかなりの部分が、子どもの進学にかかる費用という大義名分を得て、結婚や子育てでやめた(ざるをえなかった)仕事に再び挑戦するようになることが、時間の問題であることも御存知でしょう。その多くが、主婦(妻というより母親)としての家庭での仕事との両立を前提とする、パートタイム労働であることも含めてですが。

夫の場合は

では夫の場合はどうでしょうか。

私は仕事の忙しさと家庭での父親としての役割という二律背反の問題を、仕事を家庭に持ち込むことにより調整しました。しかし、

多分、私のように仕事の調整をつけることができる父親は少数派でしょう。その結果、私と妻が陥った問題に対して、母親が孤軍奮闘することにより調整している家庭の方が多いと思います。

なかには、むしろ家族の負担を極力減らすために、中途半端な時間に帰らずに、できるだけ遅くそれも夕食を済ませて帰ることにより、家庭に帰れない負い目を補っている父親もいると聞きます。父親と夫としての存在感を消すことで浮いた妻のエネルギーを、母親としてのエネルギーに集中し、それを子どもの世話にむけることによって調整しているわけでしょうか。

しかしそれは、子どもにとっては母親のエネルギーのみ二倍になることです。大人の気持ちは調整できても、一方的に世話される子どもの思いはどのようなものでしょうか。

夫も妻もシングルに、あるのは母の世界のみ

しかし、ともかく女性の場合は、子どもが思春期（それは受験期でもあります）を迎える頃には、職場か台所かは別として、昼間はシングルライフを、夜は母子家庭を奮闘する、という方が多くならないでしょうか。

他方、男性の場合は、経済的な貢献（給料振込）と家庭に負担をかけないことによって父親の役割を果たしていると錯覚しながら、実質的には一日中、シングルの生活を余儀無くされていないでしうか。

単身赴任、遠距離通勤、自宅以外に借りた都心部のアパート、カプセルホテル、台所症候群、キッチンドラッカー、私立中学受験願書のために早朝から並ぶ母親、息子の入社式につきそう母親。

いずれも一九八〇年代後半のマスコミを通じて流れた世相です。その原因については、さまざまな解釈が可能です。

私自身は、マスコミで報道されるほどには、必ずしも一般的な現象ではないと考えています。特に、これらの事が、東京以外の地域で生活する人達にどれだけあてはまるかについては、正確なデータに基づく検討が必要であるはずです。

しかし、このような事象が世相として取り上げられたということ自体は、日本において、男性が家庭の中で父親としての世界をもつことの困難さと、女性が母親の世界を捨てることの大変さを示唆していると考えます。さらに、そのことは、家族の問題において、父親不在や過度の母子一体化が問題にされることはあっても、夫婦の

世界が取り上げられることは少ない、という意味でもあることを強調したいと思います。

いったい、日本の家族にとって夫婦の世界はどのようなものなのでしょうか。父母と子どもという三者関係ではなく、夫婦という人生を共有する一組の男と女の関係はどこにいったのでしょうか。

2 “父母”から“夫婦”へ

同性のみのつきあいは広がるが

私は前回のテキストで、女性が子育てを通じて多種多様なネットワークを幾重にも広げている事を指摘しました。その意味で、血縁や婚姻という制度からみれば家族ではなくとも、実質的に家族同様の（時には家族以上に）密度の濃い女性同士の人間関係を幅広く持っている方は多いと思います。また、パート労働やさまざまな社会的活動も、その多くは女性のみの職場や団体・サークルではないでしょうか。まさに「女縁」（上野千鶴子）であるわけです。

しかし、この点では、男性の場合も大同小異です。人間関係を広

げる契機が仕事からみであることは女性と異なりますが、縄文簾からカラオケバーあるいはゴルフや釣り仲間まで基本的には男性同士の関係。すなわち「男のつきあい」が多いと思います。

逆に、男性と女性が同じ目の高さで「つきあう」場を、私達はどれほど持っているでしょうか。学校や職場では男も女も共に勉強や仕事をしています。しかし、仕事や勉強の必要という強制なしに、あるいは性的関係を除いて、「男と女が共につきあう」という文化を私達はどれほど身につけているでしょうか。

家族の中に夫婦の世界がどれほどあるか

家族においても同様の問題を指摘できます。

親戚や近所の人以外に、夫婦が「ともにつきあう」ことのできる男性と女性の友人を、どれほど日本の家族は持っているのでしょうか。家庭において、子どもを介した父母の顔ではなく、夫婦（恋人）の顔で対話し行動する時間を持っている方はどれくらいおられるでしょうか。最も長い人生の場を共有するはずの一組の男と女という夫婦の関係を、子どもの助けを借りずに創造している方は、どれほどおられるでしょうか。親子の断絶よりも夫婦の対話のなさを悩む家

族が、どれほどあるでしょうか。『濡れ落ち葉』にならないために、互いの自立を助け合うために語らう場と時間を持っている夫婦は、どれほどいるでしょうか。

先に、私は祖母の生き方から、シングルライフに備えるために必要な家族の課題を提示しました。だが本当は、シングルではなくツインでの生き方が、まず問われなければならないはず。あるいは、子育て後の女性の新たなアイデンティティ獲得の問題を、台所症候群や再就職予備軍の問題としてとらえる前に、子育て（家事労働も含めて）にしか家族の中の女性の意味を見出せない一組の「男と女の関係」（生き方）の貧しさを、問うべきではないでしょうか。さらに何よりも、私も含めて家族を論ずる者の視点の貧困さを、指摘しなければならぬでしょう。産業構造の変動、あるいは子育て論や教育論の延長、さらに誤解を恐れずにいえば、女性解放の文脈で家族を問題にすることはよくあります。しかし、一組の男と女が互いの性の違いを前提としつつ、人生の中の最も長い時間と空間を共にすることにより、いずれか一方だけでは築けない世界を創造する過程として家族のあり方を問う視点を、私達研究者はどれほどもってきたでしょうか。

そしてこのような視点の貧しさが、家族における子育ての問題を見誤る原因になっていることを次に指摘したいと思います。

専業主婦でもダブルインカム

私の家族のインカムすなわち収入源は一つです。しかし、実際にはダブルインカムといえなくもありません。

私はこれまで述べてきたように、夜、家庭にはいますが仕事をしている場合が多くなります。そのため、家庭の中の事で、娘二人を風呂に入れ髪を洗うことと、夫婦が寝る布団を敷くこと（私の仕事が終わらないと布団が敷けませんので）以外は、そのほとんどが妻の肩にかかっています。もっとも、四人の子どもの手伝いもありますが、長男の風呂沸かしを除き、かえって妻の負担を増やす結果に終わる場合が多いといえます。子どもの手伝いは、妻にとって負担軽減というよりも、手伝わせるために費やすエネルギーのことを思えば、却って負担増加になると思います。

ところで、私の仕事内容にかかわる重要な情報源であるとともに仕事にもなうストレス解消の場でもあるのが、毎晩、子どもが寝た後にニュース番組を肴に夫婦で飲む時間です。ということは、私

の仕事は、明らかに妻との共同作業というべきでしょう。その意味で、我が家の家計は一種のダブルインカムというわけです。すくなくとも、一つの収入口を二人で太くしている変形シングルインカムです。

子どもがいても DINKS では

我が家の収入の多くが、子ども、特に長男の受験勉強に備えてのためであることは先にのべました。しかし、実はそれは、私達夫婦が父親と母親としての役割を終えつつある証拠でもあることを、付け加えなければならぬでしょう。

下の三人は、妻や私が直接指摘することにより行動をコントロールすることは可能です。その意味で私達夫婦は親として生きています。ところが、長男の課題は「自立」を模索する思春期の問題と受験勉強です。これはいずれも親として直接手を下せない問題です。

長男が「自分で悩む」しかない問題です。

長男に関する限り、私達夫婦は、子どもではなく「一人の人間として」、そして「一人の男性として」いかに対処するかが課題です。その意味で、もし子どもが長男だけであれば、私達は DINKS の

世界に入りつつあるといえなくも考えます。DINKS もまた、だれもが通る人生のステージの一つであるわけです。

父母から夫婦としての先輩へ

自立とは、親の庇護を離れ自分の人生を自分で築くために自ら立つということだと考えます。とすれば、今後目指すべき私達夫婦と長男の関係は、血縁関係では親子でも、現代社会に生きる人間としては、長男の成長に応じて対等になることであるはずで、その意味で、私達夫婦は長男にとって二十数年先を生きる男と女の先輩といった方がいいかもしれません。それも単なる男と女でなく夫婦としての。

長男も、私がそうであるように、将来素晴らしいパートナーと出会ってもらいたいと思います。そこで、妻と私は、一組の男と女が人生を共有することの意味（楽しさ、苦しさ、しんどさ、豊かさ）を示唆できる先輩、すなわち「夫婦としての先輩」として生きることとを前提として、なんとか初めて迎える自分が育てた人間の思春期に対処することにしました。

子どもの自立の責任は、父母ではなく全ての大人の男と女に

もう一つの課題の受験勉強はどうでしょうか。

これこそ親子という関係が何の意味ももたない世界です。血縁関係を否定する制度が受験制度です。いくら我が子のためといっても、自分で受験できるわけでも子どもに代わって勉強できるわけでもありません。できるのはせいぜい条件を整えるだけです。

しかしそれならば、血縁関係のない足長おじさんでも可能です。実際に、私の四人の子どもは、次々と見知らぬ人達の援助を得て学校で学ぶことができています。なぜなら、公教育は税金により維持されています。そして、シングルやノーキッズの人達の税率は、四人の子持ちの私よりはるかに高いはずだからです。

さらにこのことは、単にお金の問題だけではありません。より積極的に、子どもを生む生まないにかかわらず、人間である以上、新たな生命を一人の人間へと育み自立させる責任を、全ての大人が共有していることを意味すると思います。

そして人間であるということは、男あるいは女のいずれかであるということも忘れないでおきたいと思います。

3 新たな「男と女のつきあい」へ

夫婦から父母へ、そして再び夫婦へ

子どもがヒトから人間へと自立する過程とは、さまざまな人と人との間（あいだ）を学びとる過程といえます。親子の関係はその基礎であっても全てではありません。直接親が手を下せるのは、私の経験では十歳（小学校四年生）ぐらいまでです。それ以後は、生物としての成長の面でも、学校の教科書の内容の面でも、子どもは親の指示を越えて、親とは異なる人生を歩むための力をつける準備に入るはずです。そのときから、親は子どもに対するあり方を、自分で直接指示することよりも、親子以外の人の間（あいだ）をどれだけ豊かに用意できるか、ということに方向を変えるべきです。

自分を否定してくれることを目的に子どもを育てること。これが新たな生命を送り出した男と女の責任と考えます。

一組の男と女が夫婦となり、その間（あいだ）に子どもが生まれることにより父母となり、その子どもがさまざまな人と人の間（あ

いだ)で学ぶことにより自立する。その結果、父母としての人生を終えて、新たな夫婦として改めて二人の人生を歩み始める。

八〇年の人生は、子どもと父母の関係のみで家族を論じるには豊かでありすぎます。子育ては一時、夫婦は一生と考えます。

妻ではなく夫の私の問題

三年間の私の家族の変化を多様化する今日の家族の特性に重ねながら、現代家族と女性の関係について私論を展開してきました。しかし実際には、現代家族と女性といいながら、むしろ男である私の変化を、それも子どもの成長や祖母の生活といった妻以外の家族とのかかわりを中心に論じてきたことに、気づかれたと思います。また、私が家族の問題に対して悩んだり決定したりする時には、『私と妻』あるいは『夫婦』という言葉を使って説明してきたことに、気づいていただけたでしょうか。

妻の世界が変化しなかったからではありません。現代家族と女性の問題は、女性ではなく男性の問題としてとらえなければならないと考えたからです。他の家族、とりわけ子どもと老親とのかかわりを抜きにして、女性としての生き方を論じてても無意味だと思ったか

らです。そして何よりも、夫や妻や父や母や……といった特定の、それもいずれか一方の問題ではなく、人生を共に創造する『一組の男と女が共有する問題』として考えたかったからです。

婦人から女性へ、そして、新たな『男と女のつきあい』へ

婦人という言葉には男性の側に対語がありません。女性を婦人と呼ばれる女性とそうでない女性に分ける概念でもあります。

しかし、家族の中には娘がいます。息子がいます。どのように娘と息子に接し育てるか。これは、女である娘と、男である息子と、女である妻と、男である私との関係の総和としてあるはずで、婦人という言葉の概念ではそれらを覆うことはできません。

男は女がいるから男であり、女は男がいるから女であり、夫は妻がいるから夫であり、妻は夫がいるから妻であるはずで、親と子どもの関係も同様でしょう。親がいて子どもが、子どもがいて親がいる、というわけです。

ただし、一つの家族の中における『夫婦』と『父母』の関係の強さと重みは異なります。かつての家族は明らかに親子の方に重心がありました。現代もその傾向が強いことは否定できません。しかし、

私は、時代と社会の変化は、確実に父母ではなく夫婦の生き方を問う方向に向けられていると考えます。

その意味で、これらの対になった関係をさまざまに交錯させながら、一組の男と女が大きく変化する現代社会を夫婦としてどのよう生きるか。それを、私と妻の生き方にこだわることにより問うことが、「現代家族と女性」という課題に対する私なりの応え方でした。冒頭に「私自身の世界の問題」ですと記した理由です。

そして、もう一つの前提は「あなた自身の世界の問題」でした。

ここからは本章を読まれた方の問題です。

あなたにとっての「現代家族と女性」を考えて見てください。

参 考 文 献 (前回のテキストであげた文献は除いてあります)

- 「学校教育の課題と家庭への期待」馬居政幸
(山本恒夫編『教師と父母の間』ぎょうせい 一九九〇年所収)
『新しい家族社会学』森岡清美他編 培風館 一九八三年
『近代家族とフェミニズム』落合江美子 勁草書房 一九八八年
『可能性としての家族』小浜逸郎 大和書房 一九八八年
『接近遭遇』上野千鶴子 勁草書房 一九八八年
『女遊び』上野千鶴子 学陽書房 一九八九年

- 『家族』金井淑子編 新曜社 一九八九年
『ポストモダン・フェミニズム』金井淑子 勁草書房 一九八九年
『男と女 変わる力学』鹿嶋 敬 岩波書店 一九八九年
『婦人 女性 おんな』鹿野政直 岩波書店 一九八九年
『女性と家族の変容』城西大学文化教育センター／水田宗子編 一九九〇年
『男はどこにいるのか』小浜逸郎 草思社 一九九〇年
『平安朝の母と子』服藤早苗 中央公論社 一九九〇年
『豊かさのゆくえ』佐和隆光 岩波書店 一九九〇年